

直前一橋大 国語総合演習

【3 回目】



【二】 出典…中井和子『源氏物語と仏教』／オリジナル問題

文章略解

浮舟はもとは周囲の恣意に翻弄されて生きるだけの存在だったが、進退窮まってはじめて意志を持って死を願い、それも叶わぬ苦難の末に出家する。この点で女三宮と共通点があるが、女三宮と違って浮舟は出家後も苦難の道を歩み、挫折の可能性も残る。しかし横川僧都の手紙は、浮舟が還俗し主体性を持つ人物に変身して薫に布施行を施すことを暗示する。『源氏物語』全体の女性描写を通ずる紫式部の出家観は、浮舟で大きく深まった。

現代語訳

御心ざし……（薫さまのあなたに向ける）御情愛が深かった御関係なのに、（あなたは薫さまに）背をお向けになって、（あなたの御身分には釣り合わない）見苦しい山住まいの（わが妹たちという）者どもの間で御出家になったこと、（すなわちせつかくの出家でもそれが他の人の妄念をさらにかき立てることになる点で）かえって仏がお叱りになるはずのことを、（薫さまから）お聞きして（あなたの出家の師となった私は）心配しております。（薫さまにあなたの消息が伝わった今となってはもう）どうしようがあるうか（、いいえどうしようありません）。（薫さまと結ばれることになるという）もともとの御宿縁をお損ないにならずに、（薫さまのあなたに対する）恋愛の執着をお解かせ申しあげなさ（るように振舞）って、一日間の出家の（もたらす）功德は（たとえそれがたった一日だけのものではあったとしても）計り知れない（ほど大きな）ものだから、（その、すでにあなたに備わった功德の力で薫さまをお救い申しあげるために還俗しても）、今までのとおりこれからも（仏のお慈悲を）御信頼あそばせ、と（存じております）。

みづから……自分で、額の髪を触ってみて、（出家前とは異なる短さに）手応えもなく心細いものだから、ついべそをかいいたりしてしまふものだ。（つらさを）我慢していても（いったん）涙がこぼれはじめると、（もうそれからは）何かあるたびにこらえることができずに、（軽はずみな出家をあれこれと）後悔することが多いようだから、（その様子では）仏もかえって（そんな女のことを）未練がま

しいと御覧になるにきまっている。(俗世で)妄執にまみれている状態よりも、形式的なだけの出家で、中途半端な悟りようでは、かえって(死後に地獄道・餓鬼道・畜生道の三)悪道にでもさまようことになりそうなものだと思うにいられない。

解答

問1 過去のすべてと訣別した生活。〔14字・解答例〕

問2 意志薄弱で周囲の恣意に流され、男から過去の女の代役を期待されるが副えず、他の男に靡き進退に窮して死を考え、出家する点。

〔59字・解答例〕

問3 真に主体性を獲得して、薫を愛執の妄念から救うという後半生。〔29字・解答例〕

問4 男に未練を残し、悟りきれていない心境。〔19字・解答例〕

問5 女の出家は他律的だが、最大の努力を重ねるとともに、出家自体を目標とせずその後の利他的な人生を重視すべきだという出家観。

〔59字・解答例〕

解説

問1 傍線部を含む文とその前文との述語表現を比較すると、傍線部は前文の「世の中にあらぬところ」と対応することがわかり、またそれは同文の主語に提示された「小野の庵室の世界」を承けてもいる。ただし浮舟が「小野」という土地そのものあるいは「庵室」という空間そのものに行きたがっていたのなら、筆者が「辿りつくことができたのだろうか」と疑問文形式で表現するはずはなく、「小野の庵室の世界」の前に「そうして生きた」とあることから、傍線部はある環境における、心理的な要素の強い「存在のありかた」を言ったものと判断すべきだ。答案末尾のキーワードには、解答例の「生活」のほか、「人生」や「生きかた」なども使える。また、傍線部に「願っていた」とあるので、「世の中にあらぬところ」のもとになる注の和歌が《反実仮想》の構文で表現され

ていることにも鑑みて考えてゆこう。その和歌の大意は「もしここがづらい憂き世とはことなるところだと思ふことができれば、一途に嬉しく思うことだろう」というほどのものである。「世の中にあらぬ」の「あり」は、傍線部が具体的には「小野の庵室の世界」になることから、「存在」を意味する本動詞でなく）断定の助動詞を承ける補助動詞と見ることになる。

さて、「小野の庵室」での浮舟の行動を見ると、「頑に自らの素性を語らず、過去を忘れた人として押し通している」とあり、また以前の浮舟を知る人々については「世間から、いわば浮舟は亡き人と扱われ抹殺された」との記述がある。そしてそれらをまとめて「生身の浮舟が、今まで生きてきた過去を自ら消し、世間もまた彼女を亡き人と扱う」としたあとに「そうして生きた小野の庵室の世界」とあるのだから、傍線部は現在の自分を過去から切り離して生きることを意味していると考えられる。なお、この「過去」には「自分のありかた」も「周囲との人間関係」も含まれることがわかるが、制限字数からそれぞれを分けて表現することまでは求められていないと考えてよい。

問2 設問にある二者それぞれのありようは、傍線部を含む第2段落に述べられた女三宮のありかたに対応する部分を、浮舟について

は第1段落も視野に入れながら探して拾ってゆくと、順に次の五点が見つかる。

女三宮「未成熟で頼りなく、やわやわとして自分の意志をもたず、人の恣意のままに生きる」

浮舟「母のなすままに、次は男の思うままに流離するのを余儀なくされた」(第1段落)

女三宮「六条院光源氏が三の宮を受けとった背景に、彼女が藤壺のゆかりということがあった」

浮舟「薫が浮舟を大君の人形として宇治に据えた」(第2段落)

女三宮「藤壺のゆかりの女となれず、光源氏の意に添えなかった」

浮舟「薫にとって大君の人形となり得なかった」(第2段落)・「薫の思わくにも添えず」(第1段落) など

女三宮「女房の手引きのままに柏木に靡いた」

浮舟「匂宮に靡いた」(第2段落)

女三宮「光源氏にうとまれ、進退きわまつた時、三の宮にはじめて意志が生まれ、死を考えた」

浮舟「人の恣意のままにはも早生きられなくなった時、浮舟ははじめて自らの意志をもった。入水して命を断とうという意志である」
(第1段落)

それぞれの対応項目の共通点を列挙すると、およそ次のようなものになる。

- (1) 自分の意志を持たずに周囲の恣意に翻弄された
 - (2) 男のもとに身を寄せるにあたって、その男の過去の女に対する未練のために、身代わりとして迎えられた
 - (3) 身代わりという期待に副う生きかたができなくなった
 - (4) 自分を引き取った男とは別の男と関係を持った
 - (5) 周囲の恣意に應えられなくなって、死を願う意志を持った
- ただしこれだけではまだ不足である。第3段落は全体としては女三宮の浮舟との相違点を述べているが、そのなかの「出家」に
関しては、出家後の状況が違うと言っているのであって、「出家」そのものは両者とも行っている。よって、
(6) 出家した

を落とすことはできない。

これらをまとめるのだが、(3)と(5)には内容に重複が認められるので整理する。また各項目の答案内での記述順序については、浮舟の人生を辿って書いてある第1段落に準ずることわかりやすくなる。

問3

傍線部の「暗示しているのかもしれない」は、横川僧都の手紙を引用した続きの段落末尾の「大きな含みがあるように思われる」
で言い直され、さらにはその手紙を解釈する第8段落でも「……ように思われるのである」と具体化されている。よって、答案作
成の方針として、第8段落の趣旨をまとめることを意識することになる。また、「暗示し」の対象は傍線部直前に「浮舟の今後を」
と明示されているから、答案末尾は「後半生」などの語で締めくくる。

ここで注意すべきは、第7段落末尾の「含み」の前に「単に還俗して薫のもとに帰れ、といっているのではなく」とあり、これが第8段落末尾でも「最高の貴族、薫の女を、あやまって出家させてしまった僧都が、薫の来訪をうけ、事の次第をきいておどろき、ただただ浮舟に還俗をすすめているのではない」と言い直されていることである。筆者が「ではない」と言うのだから、筆者の読み取った「暗示」の中心事項ではない「還俗」に触れてしまうと、制限字数を無駄づかいして答案に必要な要素を落とすことになりかねない。第8段落末尾から、筆者は僧都の手紙を「自らの仏弟子浮舟に、あるべき行いを説いている」と解釈していることがわかる。その「あるべき行い」とは、同じ段落内に「薫の妄念をはらしてさし上げよ」・「薫の妄念をはらせ」と二度にわたって述べられていることである。「妄念」を具体化しつつ答案に盛り込む必要がある。

さらに、筆者が「薫の妄念をはらしてさし上げよ」の前に「浮舟自身が主体になって」という解釈を付け加えていることも見落としてはならない。そもそも傍線部分は第5段落末尾の「われわれとしては、浮舟が出家を全うできたか、或はもろくも挫折したか、すべてはわからないことである」を承ける表現だから、出家に至る過程では浮舟に主体性がほとんど見られなかったこととの対比項目として、「浮舟に主体性が生まれることの暗示」は筆者にとって重要事項であると判断できる。このことの優先度が「還俗」云々のそれより高いことに注意して答案をまとめる。

問4

傍線部を含む引用部に対して、筆者は直接の解釈を提示していないが、筆者による引用部の読みかたは引用部の前後に現れているので、これも参考にしながら考える。傍線部は「出家後の女の姿」の描写として紹介されているので、傍線部は仏教的な意味を持つて出てきた表現であり、また続く「かへりてあしき道にもたゞよひぬべく」の原因として表現されていることも解釈の手がかりとなる。「浮かぶ」は仏教的には本来「成仏すること」を意味するが、設問指示どおりに文脈に即して考えれば、出家後だが生前の様子として「執着を捨てること」程度に考え、「なま浮かび」が「悪道に落ちるもと」になる「心の状態」を意味するものとして表現する。ここで接頭語「なま」は「半端なこと・完全になりきっていないこと」を意味すると考えれば、傍線部は「『浮かび』きれていない心境」を意味することとなる。

さらに、その「出家」が「男の不実にあたえかね、衝動的に」行われたもの、「男の気を引く、衝動的な出家」であり、それにについて筆者が「多分作者は、男の気を引く、衝動的な出家を、目にし、耳にして苦々しく思うことが多々あったのだろう」と言っているから、動機が不純であることを答案前半で具体的に表現できていればよい。「男の気を引く、衝動的な出家」について仏が傍

線部を「心ぎたなし」と見るはずだというのだから、「未練」などが使える。

問5 傍線部は「浮舟に至って……ここまで深まった」ものとして書かれている。浮舟の人生における出家を具体例と考えて、これを

一般化してあればよい、ということになる。「追いつめられた揚句のものであったが、彼女は必死に出家へと辿りついた」ことはすぐに読み取れるだろう。

さらに続いて筆者は、作者紫式部が「出家本来のありようである布施行を、さらに課そうとしている」とも見ているから、このことが答案の中心となる。出家したばかりの浮舟に、その出家の導師となった横川僧都が取った態度は、筆者によれば「明らかに浮舟に対する還俗のすすめであろう」(第7段落)というのだから、紫式部の出家観では「出家」のあとが問題だ、ということになる。「布施」とは「他者への施し」を言う仏教語だから、一般的な表現になおせば「利他的」程度でよいだろう。

最後にひとつ注意点がある。傍線部では簡単に「作者の出家観」としか言っていないが、その前に「藤壺、空蟬、女三宮と、私たちの出家のありようをまさぐってきた作者ではあるが」と筆者が言っていることである。『源氏物語』の中には出家した「男性」も数多く登場するが、問題文中で筆者が注目しているのはいずれも「女性」である。「女は、仲々自律的には出家は出来ない。他律的に」出家するのだ、と筆者が述べていることも答案に盛り込むことだ。

【配点の目安】 65点 問1 8点 問2 20点 問3 12点 問4 8点 問5 17点

問1

〈ア過去のすべてと訣別したイ生活〉…8点

※ア6点、イ2点

*浮舟が願った「世の中にあらぬところ」がどういふところであるのかを説明する。

*アは、自分が生きてきた過去とのつながりが一切ないことを示せば可

*イは、傍線部が特定の場所ではなく〈存在のありかた〉を指していることを踏まえて適切に説明したものが可

問2

〈ア意志薄弱でイ周囲の恣意に流され、ウ男から過去の女の代役を期待されるが工副えず、オ他の男に靡き力進退に窮してキ死を考
え、ク出家する点。〉…20点

※ア2点、イ3点、ウ3点、エ3点、オ2点、カ2点、キ2点、ク3点

*浮舟と女三宮の共通点を二人の人生をたどりながらピックアップしていく。

*アは、〈自分の意志を持たない〉ことを示せば可

*イは、〈他人の恣意のままに生きる〉ことを示せば可

*ウは、〈男が未練を持つ女性の身代わりとして男のもとに迎え入れられた〉ことを示せば可

*エは、〈身代わりとしての期待に応えられなかった〉ことを示せば可

*オは、〈自分を迎えた男とは別の男と関係を持った〉ことを示せば可

*カは、〈周囲の恣意に応える生きかたができなくなった〉ことを示せば可

*キは、力の結果、〈死を願う意志を持った〉ことを示せば可

*クは、最終的に〈出家する〉ことを示せば可

問3

〈ア真に主体性を獲得して、イ薫を愛執の妄念から救うというウ後半生。〉…12点

※ア5点、イ5点、ウ2点

*横川僧都が浮舟に説いた今後のあるべき行いを説明すればよい。

*アは、〈「浮舟自身が主体になって」生きていく〉ことを説明したものが可

*イは、〈浮舟が「薫の愛執の罪を晴ら」すという出家本来の布施行を实践する〉ことを説明したものが可

*ウは、源氏物語に書かれていない浮舟のその後の人生のありかたを暗示していることを示せば可

問4

〈ア男に未練を残し、イ悟りきれていない心境。〉…8点

※ア 4点、イ 4点

*アは、男の気を引くための出家であり、俗世に執着を残し出家を後悔していることを示せば可

*イは、アのために、出家としてあるべき心境に至っていないことを示せば可

問5

〈ア女の出家は他律的だが、イ最大の努力を重ねるとともに、ウ出家自体を目標とせずエその後の利他的な人生を重視すべきだという出家観。〉…17点

※ア 3点、イ 5点、ウ 3点、エ 6点

*浮舟の出家の描き方から筆者が読み取っている、紫式部が理想とする女の出家のあり方を説明する。

*アは、女の出家があくまでも他律的なものであることに言及したものが可

*イは、アに関わらず、出家に辿りつこうとする努力を評価していることを示せば可

*ウは、出家後の女の生きかたを重視していることを説明すれば可

*エは、出家本来のありようである「布施行」を実践すべきと考えていることを説明すれば可

文章略解

解答に同じ。

解答

日本経済低迷への危機感に起因する経済論理の強調は、科学の成果をも商業化させた。科学者は、科学知識の公共性に違反し、成果の実用性を誇張するようになった。従来の多層多岐にわたる検証や新方式の徹底的な模索は、科学の進展に寄与してきたが、科学の商業化はそれを許さず、費用対効果という指標を最優先にした選択を科学に強いる。それは、多様性を備えた科学を制限し、人為的な限界を設定してしまうことだと言えるだろう。〔199字・解答例〕

解説

科学の商業化が科学の進展に及ぼす影響について述べた文章。具体的な事例を複数挙げることで理解を助けているが、馴染みのない分野であればイメージがしにくかったかもしれない。筆者の挙げる科学者・研究者のあるべき姿とその変化、それらが科学に及ぼす影響、そして、そのような事態の根底にある「科学の商業化」という国家イデオロギーともいえるものの存在について、因果関係を整理した上でまとめあげる力が必要である。

筆者の池内了は一九四四年、兵庫県生まれ。京都大学理学部物理学科卒業。同大学大学院理学専攻博士課程修了。理学博士。国立天文台教授、名古屋大学大学院教授等を歴任。

この文章は、科学の商業化が科学にもたらす悪影響について論じたもの。まず、各段落の要点を確認したい（①～⑧は形式段落番号を表す）。

①日本の経済状態の悪化

バブル崩壊↓経済低迷↓世界経済に取り残される不安

②①を背景とした各分野への影響

経済論理（商業主義）の強調↓大学へも影響↓科学の成果も商業化（市場化）を求められる⇨科学の営みを侵食

③科学者の変化

成果の公表の遅延：科学知識の公共性への違反

④③の具体例

常温核融合騒動・ES細胞の捏造

⑤科学者の変化

自らの発見や発明の実用性・可能性を過大に言い立てる傾向が強まる

⑥・⑦科学の商業化による問題点のまとめ

・社会に迎合：新たな知見をより多様で、より可能性がある研究へと深める努力を放棄・総合的な視点を喪失

万全の措置を求めたいという科学者の願望を制限

・真のイノベーションの芽が潰される：基礎からの研究が軽視され、改良主義に陥って、科学の発展を妨げる

⑧科学の商業化が科学に与える（悪）影響 — 結論 —

費用対効果が指標↓科学の多様性が取捨される・豊かな可能性が切り捨てられる⇨科学への限界が強要される

次に、順に内容を確認していきたい。今回の問題文の主題が、本文で繰り返し述べられている「科学の商業化」であることは明確である。それを軸に、筆者の論旨を把握する必要がある。

①では、「経済の低迷状態」について言及し、それを受けて②では、経済低迷による「焦り」からか、「経済論理ばかりを強調する論調が強くなっている」とある。国立大学の法人化を機に、民間企業の経営手法が導入され、大学の研究者は「特許の数」「大学発のベンチャー数」を競わざるをえなくなり、「科学の成果を商業化」することが要求されるようになった。

ここまでは「科学の商業化」に至った背景を客観的に説明しているが、②の最終文「その余波は社会が科学に与える限界として、科学の営みを侵食し始めている」という一文に、筆者の意見が反映されていることを押さえておきたい。「侵食」という言葉から、この社会背景が科学に与える影響を、筆者がマイナスイメージで捉えていることが読み取れる。つまりは「悪影響」と考えることができる。

③～⑤では、その「侵食」＝「悪影響」について、科学者の変化を見ることが解説を施している。

最初の兆候として、科学者が特許取得を優先するために「成果の公表を遅らせたり、不十分のままの発表」をするようになった点が挙げられている。その例が「常温核融合騒動」や「ES細胞の捏造」である。これらは「科学の真髄」である「科学知識の公共性」に違反する行為である。「科学知識の公共性」つまり「成果の過不足ない迅速な公開」によって「幅広い同僚研究者からの検証」が可能となり、「科学の信頼性を保証し、それがあればこそ科学者は遠回りせずに研究を積み上げることができる」とある。よって、「科学知識の公共性」に違反するということは、科学において研究が着実に積み上がらない＝科学の進展・発展を妨げるということだと読み取ることができる。

次に、「科学者が自らの発見や発明を、……過大に言い立てる傾向が強まっている」とある。「次の研究費を得るための方便」とされ、筆者は「世間を欺く行為と言わざるを得ない」と述べていることから、この傾向もまた、科学にとって歓迎されないものであることがわかる。

⑥では、③～⑤で説明した科学者の変化を受けて「科学者が社会に迎合する」という問題を掘り下げている。「万全の措置を求めたいという、科学者が本来持っている願望」という表現から、筆者の考える科学者のあるべき姿を読み取ることができ、商業化による制限について述べることで、対照的に科学者、科学のあるべき姿を浮き彫りにしていると言えよう。③の「科学の真髄は……」の箇所と同様に、筆者の科学者観・科学観を読み取ることのできる表現である。

⑦では、「基礎からの研究がおざなりになり、改良主義に陥って、真のイノベーションの芽が潰され」という問題点について述べている。電子顕微鏡の例を挙げ、「科学の商業化」によって商業化における成功のみが重視された結果、科学の進展が阻まれ「立ち止まってしまふ弊害」があるとしている。

⑧は総まとめの段落。科学・科学者のあるべき姿を挙げ、それが「商業化」によって「費用対効果を指標にして」制限されてしまうことを述べている。最後の三文に筆者の主張がまとまって述べられており、最終文の「科学への限界が強調されると言えるだろう」の「強要」という表現から、本来「限界」をもたない（＝多様性・豊かな可能性がある）はずの「科学」が、「商業化」によって「限界」を強いられていることへの筆者の危惧を読み取ることができる。

解答としては、この最終部分を骨子として、「科学の商業化」が進んだ背景、科学者の変化、科学者の変化を介しての科学への影響に

ついて、まとめあげる必要がある。特に科学者の変化・科学の変化については、同趣旨の内容が幾度も表現を変えて述べられているので、適宜換言し、過不足のないよう包括的にまとめあげなければならない。また、それらが変化した・影響を受けたという事実のみに言及したのでは、先に述べた科学者・科学に制限・限界を強いることの問題点（科学者は本来徹底的な追究をするものであり、科学とは本来多様性を備えるものであるのに、そのような科学者や科学の性質は排除せざるをえないということ）を的確に表現することができない。随所に見られる筆者の「科学観」「科学者観」を丁寧に読み取り、科学者・科学の本来あるべき姿についても盛り込むことが求められる。

【配点の目安】 35点

A 〈ア日本経済低迷への危機感に起因するイ経済論理の強調によって〉…6点

※ア3点、イ3点

* Bの背景を説明する。

* アは、イの原因として〈経済が低迷している〉という点を押さえていれば可

* イは、Bの原因として「費用対効果が指標となる」など〈経済論理の重視傾向〉を押さえていれば可

B 〈科学の商業化が進んでいる〉…7点

C 〈科学者は、ア科学知識の公共性に違反し、イ成果の実用性を誇張するようになった〉…6点

※ア3点、イ3点

D 〈ア従来の多層多岐にわたる検証や新方式の徹底的な模索は、イ科学の進展に寄与してきた〉…8点

※ア4点、イ4点

* 「従来のような多層多岐にわたる検証や新方式の徹底的な模索をせず、科学の発展が見込めなくなった」など、全体としての裏返し表現も可

*アは、〈科学者のあるべき姿〉を押さえなければ可。〈万全の措置を求める姿勢〉など、理解はできているが内容が不明瞭なものは
2点減

*イは、〈科学者のあるべき姿が〉科学の進展を支えてきた〉点を押さえなければ可

E 〈科学の商業化は〉ア多様性を備えたイ科学を制限し、人為的な限界を設定してしまう〉…8点

※ア4点、イ4点

*アは、〈科学の多様性〉について言及していれば可

*イは、〈科学の商業化によって〉科学の可能性が制限される〉点を押さえなければ可



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--